

卷之六

徳川家康

葦かびの巻・うず潮の巻



山岡莊八 講談社



徳川家康 第三卷 葦かびの巻

うず潮の巻 昭和五六年一〇月二

〇日 第三〇刷発行 著者 山岡

莊八 発行者 三木 章 印刷所

豊国印刷株式会社 製本所 株式

会社大進堂 発行所 株式会社講

談社 東京都文京区音羽二一一一

二一 振替東京八三九三〇 電話

東京(九四五)一一一一(大代表)

© 藤野稚子 一九六三 Printed in Japan 定価一八〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
さい・送料小社負担にてお取り替えます。

徳川家康

3

う 葦 か び の 巻
ず 潮 の 巻

目次

葦かびの巻

再会

女の立場

夜明け

利刀鈍刀

三つの使者

礎

花の狂い

七

二

三

四

五

六

八

築山御殿

一〇三

良人と妻

一二四

奇人軍談

一二五

仏か人か

一三七

春月の風

一五六

逃げ水

一七四

屍の道

一八五

双鶴図

一九六

女鷺の城

二一五

春 雷

二二七

梅の新城

二三九

うず潮の巻

天下布武

二五一

不如帰

二六二

真昼の梟

二八六

濡れ青葉

二九七

男対男

三〇八

見えざる糸

三二六

甲斐の風

三三七

人生岐路

三四九

三方ヶ原

三六二

底を貫く

三七七

付 録 (参考地図及び諸家系譜)

装 幀 稲垣行一郎
挿 画 木下二介

箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染
提供 山口 勉
表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

3

う 葦
ず か
潮 び
の の
巻 巻

葦かびの巻

再 会

一

凄じい突風をともなつた雷雨がやって来る前に、阿古居の城内では思い設けぬ客を迎えてごつた返していた。

はじめその客は、十余騎の騎馬武者にまもられ、大手前へやって来て、名を告げずに竹之内久六に会いたいと申入れた。

信長から、久松家へは出兵の命はなかったが、すぐ眼と鼻の大高城によって、清洲との連絡路に深くくさびを打ちこまれている。いつ敵がやって来るかわからないので、久

六も胴丸をつけて城の守備にあたっていた。

「会えばわかると言われます。殊によると、清洲からの密使ではござりますまいか」

取次いで来た若党に言われて、小首をかしげて出てゆくと、その来訪者は馬からおりて、右手にそびえる洞雲院の老松をしみじみと見上げていた。

「竹之内久六でござるが、いづれから？」

久六が歩み寄って声をかけると、その若武者は、おだやかな表情で久六へ視線をうつした。

「はて……どなたで？」

丸い顔、血色のよい唇、大きな耳朵と見てゆくうちに、久六は「あっ！」と、思わずおどろきの声をもらした。

来訪者はその時はじめて微かに笑った。

「松平藏人佐……ではない、通りがかりの旅人。それがし一人でよい。城内で休息を所望したいが」

久六はあわてて三度もうなずいた。

「さようでござりましたか。松平……ではない旅のお方。奥方さまがどのようにお歎びなさるやら……ただいま取次ぎます。しばらく……」

駿府へいつてから見るおりはなかった。が、熱田にあるうちは、よく菓子や衣類をとどけにいった。その幼な顔が、いまもって豊かな額とさえた頬に匂っている。

久六は於大の方の居間の庭先から、
「奥方さま、めずらしいお方が……」

言いかけると声がつまった。

「めずらしいお方が……何となされました？」

於大の方はこの春生れたばかりの末子、長福丸にふくま
せていた乳房をはなして、久六のただならぬ表情にハッと
なった。

「もしや、大高城から……」

「シィッ」と、久六は眼顔でおさえて、

「松平蔵人佐ではない。通りがかりの旅のお方……と、申
されました」

於大はうなずいて身づくろいした。

大高城へやって来ている松平蔵人佐元康は敵方の大将。

堂々と名乗ってこの城へやって来れるはずはなかった。

「ではその旅のお方のこと、わらわより殿へ申上げて来る
ほどに、粗略ないよう奥の書院へ」

於大は夢を見ているような気持であった。丸根の砦で、
佐久間大学盛重を討取った、昨夜から今暁へかけての元康
の掛引のあざやかさはすでに阿古居まで聞えていた。

そして鶴殿長照に代って大高城へ入り、次の進撃にそな
えていると……その元康が、寸暇をさいて、直接阿古居の
小城をたずねて来たのである。

(母は勝った！)

そんな気持が疼くように全身を熱くして、武器蔵の前に
陣幕張っている良人のもとまで、どうして歩いていったの
かわからなかった。

二

久松佐渡守俊勝は、松平元康がたずねて来たと知ると、
「それはまことか？」

人のいい顔いっぱいに愕きをきざんで眼を見張った。於
大の方はその愕きがもしや元康への警戒心ではあるまいか
と、

「殿は、お会い下さりましょうか？」

小声でそっと訊ねにいった。

「おお、会わいでか！」

万事は胸にあると言わぬばかりに軍扇で胸をたたいて、
「松平と久松の家の縁はかくべつじゃ。が、そうそう、す
ぐにわしは参るまい。おことにあれこれ、つもの話がある
であろう。わしはな、あとで、酒盃の用意をしてゆく。そ
れまでにおことは、それ、昔語りと……三郎太郎、源三郎、
長福など、同腹の弟たちじゃ。対顔させて。わかったのう」
於大は不意に眼先がかすんだ。取りわけ武功の人ではな
かった。が、俊勝の胸には、あたたかい人の血がふつふつ

と感じられる。

「よいか。おことの大切な客は、この俊勝にとっても、子たちにとっても大切な客ぞ」

「わかりました。では、奥の書院で」

「おお、何はなくとも、心からのもてなしをな」

「は……はい」

それから於大は自分の部屋にもどって、三人の子供を呼んだ。

すでに長子の三郎太郎は元服近い十二であつたし、源三郎は七つ、長福丸は当歳だった。

それぞれ身支度を整えさせて、

「合図があつたら、三人ともども参るよう」

長福丸の乳母おもとに命じておいて、一人で奥の書院へむかつた。於大がやって来てから新しく建てたこの書院の庭には、松と岩の向うの山際にしずかな竹林を持っていた。於大はわざわざ遠く縁をまわって、わが子に母の近づくのを感じさせるように歩いた。

部屋の中では松平元康が、ゆったりと上座へすわっていた。供をして来た近侍たちは、一人もそばに見えず、書院のうちには元康と久六二人が、交互に扇をうごかしながら向いあっていた。

「これはこれは、ようこそお越しなされました。久松佐渡

が家内、於大にござりまする」

於大は波立つ感情をおさえて、入口に坐った。いまはまだ岡崎城には入っていない。が、松平家と久松家では家格にそれだけのひらきがあつた。

元康の眼と、顔をあげた於大の眼とが吸い寄せられるようにぴたりと合った。

於大の眼は見る間に赤くなつたし、元康の眼はふかい微笑をたたえていった。

元康はつと立つた。

そして、久六の前をとおって、まっすぐ母に近づくと、母の手をとって、

「そこでは話が出来ぬ」

と、小さくつぶやき、自分のしとねと並んだ位置へ於大を据えた。

「縁あつて……」

と元康はまっすぐ母をみつめたまま、

「生れた時から一方ならぬご造作をかけました。元康、一日も忘れたことはござりませぬ」

そういうと、はじめてその眼にまるく露がふくれた。

三

於大は笑おうとした。

三つの時にわかれた子。六つから今年まで人質として過して来た子。この子と再会出来たらと、そればかりが於大の生活の翳りであった。

その子が、いま自分の手をとって微笑している。面輪もまなざしも祖父の水野忠政によく似ていて、とられた手と、とった手の爪の形までおなじであった。

「もったいない」

男にしては柔く、ほのぼのとした温みの手を於大は心に刻んで離した。

「折悪しくとりこみ最中のこととて、何のもてなしも出来ませぬ。が、ゆるりとお寛ぎ下さるよう」

「かたじけない。時々本多の後家がこなた様のことを話して、女丈夫じゃと言っていたが」

元康は扇のかげでそっと眼頭をおさえてからまた笑顔にもどった。

女丈夫という言葉が、どこかわが母の像を堅いものに作りあげていた。しかし、今、眼の前に見る母は、声も皮膚も、肩も心も豊かにまるい感じであった。

恐らく怒ることのない柔軟さ——それを持っている母にちがいない。抱かれるにはわが身が大きく、抱いてやるにはまだ若い母。

「岡崎を去られるとき、わしは三つであったそうな」

「はい。まるまると肥えられて、城の門まで見送られました。お覚えはござりますまい」

元康はすなおにうなずいた。

「覚えてはいぬ。大伯母や、祖母に話を聞きたび涙ぐんだが」

「ほんに……まだ昨日のことのように思われます。それなのに、このような立派な大将にお育ちあって」

そこへ侍女が茶運び、菓子を捧げてやって来た。元康は自分が、母のために何も携えて来なかったのが、ふと不用意に思われた。

「して、お子たちはその後？」

於大としてはまっ先にたずねたい孫のこと。が、それを聞くと元康の眉はくもった。

「すぐくと育っている。が、場所が駿府では」と言葉をごして、

「わしに兄弟が出来ているそうな」

さりげなく話題を変えた。

「はい。お目通り出来たらとみな身支度を整えて居りまする」

「会いたい！ 会わしてくれまいか」

「お会い下さりますか。ではすぐこれへ」

於大にうながされて久六が立つてゆくと、はじめて室内

は母子二人きりになった。

「竹千代さま……」

「竹千代ではない。元康じゃ」

「いいえ、竹千代さまじゃ……こなた様の生れる時、さまざまな奇瑞がござりました。必ず海道一の弓取りになられるお方……功をあせて下さりまするな」

元康はびっくりして母を見直した。これが母なのであるう。さっきのまるい柔さではなくて、それは本多の後家を連想させる強い女の手応えに変っている。

元康もきびしい眼をしてうなずいた。

その頃から、田楽狭間を襲った夕立はこの阿久居谷へもバラバラとつぶての雨を投げ出していた。

四

雨の音と、於大のその後の子たちの足音に、元康はいっしょに気づいた。

岡崎に異腹の兄弟は二人あったが、一人は出家し、一人は病弱で、元康の身边はさびしかった。

いや、淋しいと言えばそれは兄弟の有無よりも、駿府へ残して来た妻子のこと。今度の出陣はおそらく駿府へ元康を返すまい。勝てば家の子たちが、敗れば運命が。

その淋しさが、元康にわざわざ母をたずねさせた。父の

異った弟たちにしみじみとした懐しみを覚えさせているのもそのためらしい。

足音が次の間をとまると、

「おお！」と元康は声をあげた。

母の血の強さであろうか。まっ先に立っている上の子は、元康の少年時代そのままだった。いや、そのつぎのもよく似ている。そして三人目の子はむつきの中で乳人に抱かれていたのであった。

「さ、入ってお客人にご挨拶なされ」

また以前の柔かさにもどった於大にうながされて、大きいのから順に元康の前に坐った。

「三郎太郎と申します。お見知りおかれませ」

「源三郎と申します。お見知り……」

「長福丸でござりまする」

むつきの乳人ともども頭を下げると、於大がかたわらから言い添えた。

「三郎太郎から、これへ」

元康はまたしても土産を携えて来なかったことを悔いながら、大きいのから呼び寄せて出された菓子を掴んで与えた。

「源三郎か。はしこそうじゃ。幾つじゃな」

「はい。七つでござりまする」

「よい子じゃ」

源三郎が菓子をかき上げてすきつてゆくと、元康は乳人の前に両手をのべた。

「長福と申したの。抱かせて見よ」

乳人はちりと於大をみやった。於大がうなずくのを見すまして元康の手にみどり児を渡した。白の平絹の裾を藍でばかした産衣を着て、長福丸は二つの拳をおとがいの下へならべていた。

視線をおおどかに客から天井へながしていった。

元康はどきりとした。

これはまた、何とよく駿府に残して来た竹千代に似ていることか。(血筋は争われぬ)

その感慨といっしょに、又しても竹千代と再会する時の有無が頭をかすめていった。

母も十六年ぶりでわが子に会った。自分たち父子にもまた、そのような宿命がまつわりついていそうな気がする。

「よい子じゃ！」

元康はそう言っただけで、それが、竹千代に似ていることは洩らすにしのびなかった。

「どれがいちばん、元康の幼顔に似ていようか」

於大に笑顔をむけて長福丸を乳人の手にかえた。

「はい。長福がいちばん似ているように存じまするが」

「そうか、長福かの」

ホッと吐息をもらしたとき、

「えらい雨じゃ。竹林にあたる風がたばしるような音をたてている」

酒肴を用意させた久松佐渡守俊勝が、猪首を前へおとし、
た胸丸姿で入って来た。

五

久松佐渡ははじめから元康に一目おいた。松平家の当主としてよりも、初陣以来の元康の実力をいかにも好人物らしく噂のままに買っていた。

祖父の清康といずれの器量が上であろうかと、すでに人は評しはじめているような。

「縁につながる者共ゆえ、宜しゅう頼みまする」

三人の子供のことを言われると、元康もまた大きくうなずいた。

「いづれ心を協わせて働かねばならぬ時が参ろう。その折には三人ともに松平を名乗ってよい。わしには肉親は少ないゆえ」

夕立はなかなか去らなかつた。この豪雨では義元も本陣をすすめ得まい。

といって、義元到着のおりに、城をあけて居てよいはず

はなかった。

「なかなか晴れぬ。足どめの雨になった」

ようやく雨脚の細りをねらって阿古居の城を出たのは八つ（二時）近かった。

於大は佐渡ともども大手前まで送って来た。

「いずれまた……」

会えるか会えぬかは、口に出せない乱世の別れであった。元康は街道へ出てから、何度も馬上から見返っては手をあげて去っていった。

八つ半には雨はあがった。が、雲はまだ頭上を去らず、そのまま夜になりそうな暗さであった。

於大は自分の居間へもどって二人の子に、あれこれと元康のことを聞かせていた。元康が幼いおりに長福丸とそっくりだったことを告げると、三郎太郎と源三郎は、わざわざ寄って来て改めて長福丸をあやししたりした。

そこへ血相変えた良人が走りこんで来たのは七つ（四時）近かった。

「御前！ おどろくまいぞ」

佐渡はそういうと、そばに子供のいることも忘れて、

「駿府の屋形が、殿に討たれた！」

「え!？」

於大は一瞬それが呑みこめず、

「駿府のお屋形が……」と言いかけて、

「それはまことでござりまするか」

「わしも信じられなかった。が、もはや疑う余地はない。

清洲の殿は、まっ先に義元の首をかかえて馬を駆り、ときの声をあげて清洲へ引きあげていったという……注進の者が二つの眼で、はっきりそれを見て来ている。どえらいことじゃ」

「信じられませぬ。いったいどこで？」

「田楽ヶ窪から桶狭間へかけて血の海になったという。さもあろう。五千の大軍がみな殺しになったのじゃ」

「それで……それで大高城は？」

「そのことじゃ。ひとまず首をかかえて清洲へ引揚げられた。とは言え、あのご気性の清洲の殿、今夜はとにかく、明日にもならば勝ちに乗じて一もみに……」

揉みつぶすのであろうと言おうとして、思わず口をつぐんだのは、その城に入っている元康が、すぐさっき、ここを辞していったばかりの於大の子——と、気づいたからであった。

於大は眼をつむった。

織田家のために喜ぶべきこの戦勝が、またしてもわが子を死地へ追いやった。

織田の全勢力であたられては、なれぬ小城で鬼神といえ

ども勝ち得まい。

「殿！」

眼をつむったまま於大の声は絞るような切ないひびきをもっていた。

六

「殿！ 十六年ぶりに会ったわが子、取乱したとお叱り下されまするな」

「何の叱るものか。われ等の知らぬところで、すでに勝負はついていたのだ。わしでさえどうしてよいのか夢のような気がする」

「殿！ わらわに差出た計らい、お許し下さりませうか」

「おお、許す許さぬことではない。策あらば申してみよ。おことの子じゃ！ 久松の家のためにもわるう計らう人ではない」

「ならば久六を、すぐに清洲へおつかわし下されませ」

「久六を……何と言ってやるのじゃ」

「大高城の松平元康。この母がいんで説き伏せても必ず清洲の殿にはさからわせませぬ。と……」

「おお！」

俊勝は膝をたたいた。

「それゆえ攻めるなど、申すのじゃな」

「はい。その間に城を捨てて引揚げさせる。それより他に手だてがあろうとは覚えませぬ」

俊勝はうなずいてすぐ又外へ走っていった。

於大はもう一度眼を閉じてみだれた息をととのえた。

運命！

それが、これほど大きな波になって胸を打って来ることはなかった。

駿、遠、三の三カ国に君臨して、永久に榮華を約束されたかに見えた今川義元が、すでに一個の泥によれた首に変ってはいうとは……？

みずから駿府御所と近臣に呼ばしめ、屋形と呼ばれるをきらった義元……そのおごりも一朝の夢であった。

女性の身にとって乱世ほど呪わしく悲しいものはない。

が、この乱世は駿、遠、三の安定をまた根こそぎ揺り立て、ごうごうと以前にまさる怒濤の中へまき込んだ。

（いったいこれから誰が、どのような勢力を得てゆくか……？）

むろん於大にその見透しはつかない。が、出来得れば、わが身辺だけは誤らない措置を講じて血の香だけは近寄せたくなかった。

「母さま、何が起ったのじゃ」

両親の様子のだだならなさに、源三郎がたずねたが於大